

特114

944

新正曲
曲調譜

筑前琵琶歌

水也田緑水 秋の下

国立国会

51.10.1

図書館



始



序

近時家が筑前琵琶は旭日昇天の勢を示し家庭
 音楽として紳士淑女と歓迎せられ亦一方は劇界
 へ進み琵琶を其人に利用する様も成りて茲に
 各百に急進の發展を認められたり之に付て琵琶の
 著書は深山麓の如く存する志が外から曲譜の
 正しく文章の間遠の如く定全なる著書の母といは

空の横の川を流るる水

茲に於て海老の巻を研究し其の西調の曲譜を
附し春巻一夏巻二秋巻三冬巻一三及新
曲上等下等湯歌集の十一巻を分ち本書に考及り
後一巻の所以下河りる水

水也田保の流

曲譜及曲節

一三三四五六七甲乙

音調

合の手の譜

流一の譜

春節

夏節

秋節

冬節

番、号、丁、鳥名
木、火、土、金、水、地、天

□

琵琶の合の手
詩又は詩の類

○

歌又は歌の類

|

續 き

∞

吟變(例せば五六の中間の声)

☆

五絃節及十三段秘曲の合手

∧

崩勇社の譜

々

悲哀の譜

?

憂愁譜

フ^風

大落一小落

夕

夕日節

月

月節

ツ

露節

ク

雲節

旭

旭節

山

山越節

ろりーりりりり

淘ゆり伸のび上あげ
伸のびべ上あげ
淘ゆり伸のび下さげ
伸のびべ下さげ
抄すひ上あげ
強つよめ
大おほ廻まわり淘ゆり伸のびべ
淘ゆり廻まわり

目次

乃木將軍	四一	乃木將軍	四一
名和長年	三二	小袖曾我	八六
瀧 衣	二三	千手の前	七九
山崎合戦	一六	高山彦九郎	七二
吉野移下	九	山科の別	六〇
櫻田の泡盛	一	小松原	四九

筑前琵琶歌

秋の下

(奥傳の巻)

水也田糸水編纂作曲

櫻田の泡雪

^一 東の都千代田城
^二 世の時めさし徳川
^三 水の源衰へそ
^四 浪士は四方に奔走

^一 世の時めさし徳川
^二 水の源衰へそ
^三 浪士は四方に奔走
^四 浪士は四方に奔走

櫻田の泡雪

時の大老伊井並彌は
蹶然起て象藏を排し
頑固自尊の輩を
職り或覺の一人と
古れ或慕ふ怨いそ
只が一徹を國に賣る
次は万延元年乃

世の大勢或卓観し
并港貿易の止む或況
三百年來太平の
日夜肝膽を碎き
大勢遂に僅耳に
逆臣たりと誤りし
弥生二日となりしは

兼て謀める水戸浪士
外櫻田を待ち受けて
以國の面目保はん
今宵限りの命なり
身は捨て國を殉ぜ
思ひ込みたる是れ
櫻田の泡盛

明日の上巳の登城は
只此一討ちには
申合せ十七番
心の減酌みかけ
弓矢とる身の一筋
其の夜も更けの鐘
スハ時刻を一同

櫻田の泡盛

十雀

三

四 赤き金羽以身を纏い
 折しも雪は降りしる
 同勢すべし二百人
 綱代の飛物解やかま
 前驅後従も嚴めし
 怒み重なる河井直郷
 飛物目掛龍せまのたり
大倉水車

四 思ひし走り行
 中氏猪め河井大老
 花桶の紋計
 警蹕の勢掛けさせ
 櫻田門差一掛れば
 五 イテヤと計りに後りれて
 七八 狼藉も数多の人々

六 右往左往も立ち騒ぐ
 六 統いて湧子清三郎
 四 草壁三郎左衛門
 四 君の大事死力つ
 五 咫尺分ぬ大電に
 四 思ひ掛けざる不意討は
 五 防残し氣勢何所か

五 中氏押分河東赤之
 五 大太刀翁一立ち向ふ
 四 槍を揮きて躍り下
 五 此討は先途と我へども
 四 進退心のもなりず
 四 其の鋒の者は是五みだれ
 五 踏み止まり一人も

梅田の記

五

五 今は浪士打ちなされ

七 斯る浪士の入齋藤盛物

五 來物の之成蹴平

五 柄を成掛け立ち出づ候

五 飛び掛りさす切りの候

六 象寨をぞか敵す處の

七 遂に主載の恨み成各み

四 算成乱を斃れ者

六 卒然天の如く馳せり

六 掃部頭は大太刀の

四 此時早ら楯回重藏

七 智の程は防ぎも

四 叱咤す如く並強

六 雲に紅葉散らす

四 されば浪士の面々は

五 首成おどろき尖刀は

四 全国の言葉唱へつ

四 早や引き揚るる時

六 勢い流くも返す候

六 大太刀翁立ち塞り

四 疾り退き給ふ

梅田屋

四 目差仇敵討ち止め

五 一貫の勢はつゝあはれ

四 一同は凱歌成奏

七 一旦乱れ河井の侍人

六 薩摩の浪人有村は海門

四 此は某列に受けたり

四 浪士成在に我ら聞

羅 雞 子 細 川 脇 坂 西 侯 の
 取 多 へ き 道 は 遠 へ 志
 思 い 込 ん だ る 東 心 乃
 櫻 の 花 や 六 つ の 花
 惚 へ は 今 も 長 次 村
 生 心 根 が 暮 け る

六 層 へ 入 け 春
 散 ら す も ち め 玉 の 為 ぬ
 河 床 へ 大 和 武 士
 遊 び 終 へ 夢 の 跡
 生 心 根 が 暮 け る

吉野静下

三 去 程 日 は や 久 ね 下
 三 道 方 出 下 者 此 合
 三 西 戎 持 多 下 り 者 此 合
 三 火 影 幽 か 見 せ け ば
 三 転 じ ら 起 せ ぬ 道 へ 合
 四 華 表 の 前 へ 出 け 春

三 木 の 下 周 の ま じ ら ね 下
 四 ち ろ ん ち ろ ん 静 心 前
 六 ぼ ろ か 向 左 の 谷 間 へ
 四 い た め る 道 も 打 ば 合
 四 い か な る 神 が し ら ね 合
 七 是 ち 静 心 前 の 春 見 け 春

吉野静下

九

何れも人物もなしく
あはすみ入り石段
道者移多居りるれ
吉野の山嶽を登る
神の山前を伏し
都より人へいりて
介へ及引合せ給へ

何れも蘇生れるさあ
昇り見ればふけいかに
此れは何処の間いけるに
いも嬉しき限りなく
あはれ歎くは安穩
又我君を守護せられ
神を願ひかけましくも

河やまかきとて
漸とまを立ち上り
祭の日もあつら
舞などあればあ
またも涙の程なり
怪しきもあれば
風情あやみ見て

涙も春を居たり
辺り見れば今日も
猿樂の舞白柏子の
昔の事の志のばれ
斯で暫くはたけ
思ひあつらひ
山嶽の大家より
集む

吉の神

一

一〇

四の上蔭は此のなるの
三特は軟陰多流るるなり
三減や老人まほほしむの所
四のたゞ金を待ら者なり
五此頃の憂は銀難く
六天の生せる養質は
七入すたれて見えたりけり

三人も見えぬに唯いふ
四心得ぬ次第なれ
四糸は各段同はなん
七さもつりぬへ静は前
三やつれさすれ原より
四雨は葉かたる梨花一枝
四かるはへ此やまの

四執事の傍にそむたれ
四何処の上蔭かゝるぬ共
四霊験母友を波を給へば
三強て勧められ者れど
五近りほろの賤の女を
三辞み給ひそたけしが
三神童の忠かゝるや

三静は前より静は前
三本山は藏王権現と
四印法樂候へかゝ
六は、めの程は静は前
六させる養能見えず
三隠るゝる居らぬか
四都はあれ山に

吉の静下

一三

見—らん人 あはれ
 思—い おも はめ はめ の こ 起 た げ け けり
 白 しろ 粉 こな 子 こ の こ ぐ ぐ だ だ れ れ あ あ れ れ ぐ
 哉 や せ せ の の 者 もの あ あ る る な な か か け け れ
 色 いろ 外 そと へ へ 歎 なげ け け る る と と の の や や
 三 三 お お い い ち ち げ げ ぬ ぬ い い づ づ
 山 山 向 むか へ へ の の 痕 あと は は 悲 かな し し じ じ に

一 一 一 一 舞 ま を を 祈 いの り り 人 ひと
 素 もと よ よ う う 天 あま 下 した を を か か れ れ ぬ
 三 三 流 なが る る 石 いし の の 向 むか へ へ 大 たい 象 しやう も
 七 七 実 じつ を を ね ね も も い い 内 うち を を ね ね ぐ
 五 五 室 むろ 打 うち り り 向 むか へ へ 静 しず け け 前 まえ
 七 七 向 むか へ へ の の す す じ じ の の 思 おも へ へ だ だ ま
 河 か を を け け れ れ 俵 わた へ へ 伏 ふ せ せ

一 一 二 二 の の 世 よ は は 忘 わす れ れ る る 人 ひと
 秋 秋 親 おや の の 別 わか れ れ 子 こ の の 別 わか れ
 下 下 あ あ れ れ が が 又 また 妻 さい の の 別 わか れ れ な な り り
 三 三 衣 きぬ 打 うち ち ち め め の の 泣 な け け 伏 ふ せ
 六 六 又 また 悲 かな ぶ ぶ 人 ひと と と 心 こころ を を ち ち ぎ ぎ け
 三 三 い い づ づ 向 むか へ へ け け れ れ 俵 わた へ へ 伏 ふ せ せ

七 七 別 わか れ れ の の 心 こころ は は 悲 かな し し け け だ
 九 九 折 お ぐ ぐ ね ね を を 実 じつ も も 悲 かな し し け け だ
 三 三 と と 流 なが る る 石 いし の の 向 むか へ へ
 五 五 並 なら ぶ ぶ 人 ひと の の 袖 そで へ へ 伏 ふ せ せ
 五 五 い い づ づ 向 むか へ へ け け れ れ 俵 わた へ へ 伏 ふ せ せ

言の静下

山崎合戦

一 天の作は藤原は猶ほ遠くはる
 二 況んや君が教へ天の
 三 やはか報はるる人さ
 四 天か下知る時は今
 五 頃ほ天正十年水無月之日
 六 羽柴筑前守秀吉は

一 備中高松を此に報はる
 二 智勇勝れぬ将は
 三 毛利と和睦取
 四 亡君恩顧の諸将等
 五 合軍四軍の總大将
 六 五十餘州攻末つといふ
 七 幸先なりと知られ
 八 大いなるし給い
 九 故ら事案は打明
 十 頃を尾ヶ巻多道
 十一 逆賊誅伐の歳は定
 十二 推されたる采配
 十三 切り鹿かむむ権柄
 十四 されば文戦は十三日

四 晴れの仕合は山崎と
 五 十一日の夜中
 六 神内の宿傳取り
 七 斯て春は尾は助は終い
 八 汝がいまさかけそ
 九 さらなも短く夏の夜は

一 敵も斯と告知らし
 二 尼の告げ打ち立て
 三 磐子の表のみおつて
 四 明日の準備は任じす
 五 彼の天主山は大事なれ
 六 取れと仰せ奉り
 七 軍議は明智方に

一 皇の一方の大將なる一
 二 決死の身を引連れて
 三 事分ばかも樂のほう
 四 東地は白の抱かりわ
 五 百地は黒のようい蝶
 六 間近く見えておろかず
 七 阿いせかけを吳れずし

一 松田太右左衛門尉正久は
 二 敵も先へ天主山を奪ん
 三 一息吐き膝下せば
 四 ちめなる旗は中に規れ
 五 池田父子の馬を下す
 六 五匁筒の強弱藥を
 七 弓をみようぶ時はのれ

山崎の戦

七 赤い山の上より

五 バラバラと打ちあつて

二 火多しとち倒るる

五 羽柴方の旗あつて

四 松田若つと勢あつて

下知する間隙もあつて

五 うちをたれ大居は

六 百道の電光石火射す

四 砲音もろも松田の軍兵

五 火多しとち倒るる

樹の間も草下庵

四 いと撃ち返せもの共

五 けはれ一巻胸板

三 羽柴の勢は之をみて

一 槍と倒れあつて

狭霧の晴れを東方

旭も雅く冷太刀の

金鼓のいさゝ鳴神の

五 敵も味方も勇み立ち

七 血の雨の繁葉吹天

五 追ひつゝあつて

七 たりとも西の山際

五 キラリと指のぼる

一 光もぼやけ

五 室をたたく砲音

入能れはる劇戦

馬蹄の砂煙地

五 志げ情負もみえり

山井合戦

二一

傾く道の足程なや
 漸次シの押入カの
 止トる残る数騎シの
 最シもやらの小栗栖の
 嵐シの腕シの消えにたれ
 哀シも散らるれ
 欠シぬる重なる勳功シの

昨シも少ゆる富将シの
 遊シも勝龍寺シの
 伏見シの方へ落行シが
 竹シの下露シむすふ間も
 可シから総シと桂シの
 浮世シは桐シとさし
 推シく始シる富将シの

推シく始シる富将シの

濡衣

柳シ左近協将シ大友の親母は
 筑前シの守護シとなり
 又人シは息女シ春姫シの

又シ祖シの名譽シの後シに
 冷シ泉シの津シに
 唯シかりぬの疾病シ

一 取らるる死かた去りさせられれば
 二 つよをば迎へ給いしつ朝
 三 後の母も愛下されが
 四 女の児こを譽ほめりて
 五 射る矢やの如ごとく返かへりけるが
 六 生なまし我われ子こに代かりしる
 七 河からぬ謀はかり計はかりを企こころて
波なみ千ち鳥とり

一 程ほど経へて親ちか母ははな継つ配がの
 二 此時このとき春はる姫ひめはな十二じふに歳さい
 三 継つ母ははなの懐なご姫ひめを
 四 斯かくして三年さんねんもならなからず
 五 進すすむつつの母はの慈あはれ
 六 豊とよけきき榮さか華はみなもの
 七 去い程ほどはな眞ま方かた傳つたの家いへ東あづま共ども
雁かり

一 一夜いちや密ひそになめめしし合あせ
 二 撃うつつ来き似にてし生なま料りょうをなば
 三 仔細しさいのなままとと問とひひ給たまへば
 四 さら人ひとの依たの囑みかもなり
 五 さらば誰たれ人ひとをな頼たのまればが
 六 曲まが者もの遂ついにはなるるになり
 七 春はる姫ひめ君きみはなかなてまれ
五ご番ばん

一 一人ひとりの曲まが者もの死し引ひ捕とらへ
 二 親ちか世よ又また婦ひともな出で来きり
 三 曲まが者ものおなめめるる氣き色いろ
 四 眞ま方かた教しよえなめめ忍しのむむ
 五 疾はや言ことへな問とひひ給たまへば
 六 申まをすも畏おそれれ多おほくも
 七 眞ま方かたはな調てい伏ふくえなとと思おもひひ
五ご番ばん

満衣

妙見^四新誓^三歿^二の給^一ひも
 殺^四くよらの心^三像^二頼^一
 娘^四は途中^三逢^二給^一へば
 以^四拾^三め名^二を申^一け
 きてもなぬ中^三言^二ひ
 失^三はとつるがや
 亡^三人の子^二思^一へば

靈^三骸^二今^一に何^一らぶれば
 証^四據^三と云^二は今^一宵^二の雨^一
 必^三ず衣^二や濡^一れつらむ
 奥^三方^二何^一と泣^二き伏^一ふ
 何^三答^二何^一をみかかり
 子^三は子^二に何^一を子^二に何^一らぬ
 事^三事^二眼^一ばか
 道^三理^二めきそすえけり
 先^三づ娘^二の衣^一拾^二め
 砂^四ま塗^三れ汚^二染^一も
 深^三き慈^二い沈^一みけ
 新^三る魂^二深^一のつらん
 流^三必^二下^一る松^二半^一の舟
 や親^三世^二は先^一き

六^一よと洋^二にむせ
 親^四母^三は不^二審^一の眉^二打^一め
 雨^四ま濕^三りーのみ
 備^七はと愕^六き父^五親^四世^三は
 痛^六ま痛^五ま春^四娘^三ま
 夢^六はもろもろと
 佳^一スヤ〜と臥^二居^一たり
 湯^水

三^一道^二理^一めきそすえけり
 三^二先^一づ娘^二の衣^一拾^二め
 四^三砂^二ま塗^一れ汚^二染^一も
 五^四深^三き慈^二い沈^一みけ
 五^五新^四る魂^三深^二のつらん
 五^六流^五必^四下^三る松^二半^一の舟
 四^七や親^六世^五は先^四き

四 姫の寝所も走せ入れど

五 又上りの名されけり

六 久おは金骨がこへか出へん

七 姫は寝耳もまがからは

八 清しき巻もゆきも入す

九 母成唄いし出でけり

十 尚ほ上には人成頼み

十一 喜姫おどろき眼成さす

十二 久と親世は夢祝く

十三 つます申せと宣ひたり

十四 久へも出で候はずと

十五 ろれそ衣は有りて濡れけり

十六 証據と減り知られたり

十七 母成久とは何事や

十八 斯も浅様は非道の子

十九 烈しき怒り氣も入り

二十 心へぬき濡れけり

二十一 さとれど人成義理の中

二十二 泣くも外なるかき

二十三 何の因果かいと子成

二十四 祀る極元も下り

活衣

二十五 思へば世も恥かき

二十六 衣服成見ればあはれ

二十七 着せしはさす彼の人

二十八 姫は分疎せんすへも

二十九 陽も怒る父親も

三十 又の鏡も為す事か

三十一 さらし泣き板に放す

二九

二八

五 娘はばと取すか
 五 冤罪の汚名は身は負ひ
 七 されは是れを南又上
 六 見上る顔と見下す顔
 五 十六歳は一期と
 四 かくて娘の成敗は事治りか
 四 又の枕歌ははらばはら
 十 毒

六 死ぬる生身は惜からぬと
 三 逝くはなかに
 五 是や此世の別れと
 七 みる涙とみづもに
 三 花の蕾は散ら
 三 何る夜の夢は喜娘は

四 着せられま干すも
 三 ながり実土の
 三 はななりけり

四 斯くいふは潜然
 三 後主の妻のなみと
 三 佛の道に入りは
 三 流れをつらぬる
 三 濡衣塚と今も

四 泣くもみれば夢
 五 親世は終る夜心
 七 手向の水や涙さ
 三 下とも哀れの碑
 五 川のほとりに残り

川のほとりへ残りけり

名初長年

天^三二日の光^二な^一く^一地^三一^二刻^一の例^一な^一
さ^二も^一天^二系^一来^一の^一君^三の^二は^一か^一げ^一の^一は^一ず^一だ^一ふ
隠^二政^一遷^一を^三給^一ひ^一より^一妻^三は^二考^一案^一なる^一者^一あ^一る^一が

雲^三の^二袖^一晴^一れ^一て^一主^一
作^二は^一喜^一ぶ^一に^三来^一知^一つ^一翻^一
閏^二二^一月^一の^一二^一十^一三^一日^一
畏^三れ^二る^一も^一大^一君^一は^一
た^三ら^二一^一人^一具^一に^一た^一ま^一ひ^一
山^三路^二我^一た^一ら^一し^一谷^一に^一越^一え^一
千^三波^二の^一湊^一より^一給^一へ^一春^一は

名初長年

ふ^三た^二は^一あ^一ら^一た^一日^一幾^一
時^六も^一次^一は^一元^一弘^一ら^一年^一
月^四三^一程^一の^一ら^一ら^一夜^一
六^四條^一少^一将^一忠^一顯^一の^一み^一
い^七う^一か^一た^一ら^一所^一に^一あ^一ら^一せ^一せ^一
漸^五く^一五^一更^一の^一頃^一も^一
忠^四顯^一清^一辺^一を^一走^一せ^一廻^一り

三 伯耆の國より人なる魚

四 やかき清波出汐や

下 かきめしきふ浮舟も

中 ながき日嗣の影さへ

七 船見れば波落と

三 ふなばたゆく鼓の音

ふなばたゆく鼓の音
浮波の夢成結ぶも地

四 魚釣り船成りたらいつ

中 濃波ははなれて沖行

下 舟ははなると高所産

下 舟ははなると高所産

七 眼界はさへ志ら浪乃

七 うきふらふみ心船

舟ははなると高所産

三 磯ら浪も音あかふ

中 日影日のゆく末徳乃

三 されば忠歌磯より下り

四 此河なりと矢取り

三 尋ねられとも答ふ海鳥

四 阿まねく知れ人こそ是れ

四 名和長年と名を添ふ

名和長年

下 舟ははなると高所産

下 舟ははなると高所産

四 とふらの翁成格も

四 人を知れ者有るや

四 ふも白髪海士は

三 舟ははなると高所産

六 さて忠歌の巻上より

五 やがて勅使が来たて
 四 主上隠岐に召させ
 三 長年の武勇が閑居され
 二 だのまれば進らば候哉
 一 天のものを懐る心地
 勅使申上げつるも

四 長年以て世に名を著し
 三 今この浦に遷座の事
 二 以て憑心する所なりとの仰り
 一 忠義の功も長年には
 族にも成評はつらん

四 軍備の次第を言ひ合の
 三 稲津の指々出づる
 二 長年砂上九拜し
 一 臣が一生の面目は
 船の上山は若くかまへ
 軍備已に整ひ坐す
 長年の赤心成り

三 おのれは主上の御座
 二 斯く長年を誦濁り賜はれ
 一 再も存難き勅命あり
 族にも以て綸旨傳へ
 かりの御所を存り
 復令要書は傳へし
 新儀も御座り候し

四 敵慮は安んずるは座をせしむ

一 河にたのもく申者なり

四 以興の用意はつれど

七 船の上山は急ぎ

四 黒烟高くのかけ者なり

四 河れはは橋者等が

一 族をたつて行末は

夏 可なりは成色も現はし

四 さらも俄に即返る

四 長平は上りて負は進

四 折れも右の山の端

四 長平はなれ成り

四 報をたれ河は候

四 供をする上はなかり

乙 河を川に用はる物なれど

三 上流に感歎

。忘れぬはももへも浪の河は歳

三 河船のうへまをめと

四 かくはは数は賜は

六 忠義の程は五の

中 濁るも残りも

三 大坂ははせ候也

七 名はふもれぬ長年が

七 烟ももに河ははれ

七 東の世道もは

考
一 河にたぐも天雲成
二 河船の上の山風
三 碑さくま日影
四 輝くは代々さくま
五

中
一 都の室多吹きかす
二 三つの鯉あちりぐに
三 かげやくは代々さくま
四 五

乃木將軍

一 秋風清涼あふみと袖ぬらす
二 明治大帝の御大業
三 重なる後と袖はもた
四 茲も乃木陸軍大將は
五 下鎧ひし所又夜成
六 上成りやまは下成標本
七 志るも知らぬももるもまに

乃木將軍

一 大正元年長月十有之日に
二 哀しみ悲しむ國民が
三 身し張る裂き思なり
四 明治大帝の軍人は
五 堅く守り急らさず
六 至真心を勵むはれ
七 君が威風成慕いあはる

四一

四 曾三 旅順の攻撃
 三 樹々 吾界の英雄
 三 心多 決する事
 四 東支 以所引為内
 七 うれし けねを 岩清水
 三 養一 存を 海老と
 三 此れ 今生の 吐腹乞
 主い

四 二見 成失い 勲功
 五 仰 かけたり 將軍
 四 大 華儀の 前の日
 三 皇太子 攻下 した
 五 清き 流成 何とれ
 三 漣 東と 浪 押さ
 三 又と ちた び 此の 世を

五 君の 御姿 相見事
 七 重き 紋儀 珍と 飾り
 六 流石 程も 勇將
 四 時 一も 轡車 の出
 三 夫人 と 共 先帝の
 五 最後の 別告 げ 後
 七 多 分 胸の 是 格さ へ

五 ねん じも ち ち ち
 五 殺身 の 罪も 軽から ず
 五 心 かな げ かり げ
 四 日 頃 熱 減の 荷 重は
 三 以 尊 骸と 懸 棒
 四 病と 痛を 退 出
 四 腹 多 分 ち ち 心 地

乃木将軍

五 此世の各名を記して
見りて実りて立てて
名將を賢く又人
減の色を深みなり
神をさうりて
三 けふの
六 力送子
七 心臓
四 何れ方ぬけ
五 忠魂は
三 今
四 今

七 此世の各名を記し
見りて実りて立てて
名將を賢く又人
減の色を深みなり
神をさうりて
三 けふの
六 力送子
七 心臓
四 何れ方ぬけ
五 忠魂は
三 今
四 今

一 答ふるものは
二 家の一
三 愕然とて涙
四 夢をゆめみる心地
五 明治十年の
六 一から九りの

一 松を枝渡る松の風
二 心も空を馳せ
三 遺書は披け
四 軍旗は教を
五 君の恵のつ中
六 一がれか時

二 實に凡そ聖人も
 三 孝養厚きは祈願も
 六 今はさらにもやま
 四 大聖人は華房に
 三 歸りての黄野樹
 三 鏡思諸君五七人
 七 吹は又永年正月十一日
 二 忘上難きは父母の國
 三 母君は腦平癒の効
 五 道念の告別申さる
 三 道善老師の訪し給ひ
 四 此世は來觀也英
 四 少松原の大路を差掛り
 五 此に在修左門景信は

四 建長己來の法敵を
 五 折も有らば跟て相ふ
 六 數百人の難共列られ
 七 づら我れをかりかね
 四 道に敵ありて相やま
 六 トット唾めしぞ打出
 七 射る矢は雨のぶら

小松原

四 深く高祖の嫡み有り
 四 日頃の本望此の時なり
 四 路次夾んで侍伏せり
 四 引ひよかりと宗族止め
 四 方より用意とよらぬに
 五 人馬の物音聞の妙
 六 打つ太刀は電の如し

五一

不意の狼藉象家敵等
 一 危し何んぞ計りか
 二 法衣の袖行ちのり
 三 河の幸い難立て漸
 四 仇次坊さ剛勇也
 五 さくねを悲傷の最後
 六 二藤左近五吉隆は
 七 二人は具して出逢
 八 群る敵戎物もせ
 九 大厦の一本は非もや
 十 斯る折も天津の威
 十一 北浦忠吾忠内り

三 かく見ゆるも躊躇等
 四 今や怨敵うけたるれ
 五 玉の柱も仇なり奴
 六 縦横母盡す斬り立
 七 重々金剛の候念は
 八 夏之敵死打ち惱
 九 此る怨敵東條左衛門
 一〇 疾風の如く馬のりか
 一一 研ぎ出せ武勇の光
 一二 遂に身敵斬の深を
 一三 目も物みえかおせよ
 一四 二藤吉隆うは有り
 一五 二人は具して出逢

七五

七下
五三

六 六日連日次の恨
打下り等剣の電
歳歳狂ふ太刀風は
走る血潮の光明
身体のみ馬も落ち
大一人の一大事
至成扱は散り

今日は今なき
雷とどろく下れの一喝
眉間を穿ぬる疾
眼をみても東條業信
血吐けつる休れ
光虎細子等園根根
折みも散り行く松火の

滑を踏なむ鳥合の如
互の母事は扱も金
られや恙心
浅れども秋の御庇
少も早く天津の鍛へ
なごも我は浅疵なり
唯傷もは境思ふ味

夢やるるは世の面
大聖人の血身の止
威徳を敵は去り
更なる夜風を人の
心は世を言上り
身余もをに別條の春
法の為るは心

五 華地ちのりて 結ぶ 重みの
三 敵を 憂せしは 本意 心ならず
三 先づ 目撃 或 葬れ けり
五 我 一言の 告別 せん
二 二 藤の 耳に 伝へ ぬ
四 日蓮 なる 吉隆 地
五 聖者の 梵音 流 ながて

三 佛果 悔り 彼等 死
五 世の かけ みの 悔 たる
六 吉隆 最後 ほど ちか
三 深手 息も 絶え ぬ
四 左近 心 成り かな せよ
二 夢 夢 夢 活け 終ふ
三 心 胸 激 意 熱 の 鼓 入

七 吉隆 自ら 目 見 見 可
四 尊体 母 事 中 老 老
五 吉隆 或 運 持 たる こと
三 敵は 一旦 退 じ とも
四 今 時 早 此 去 り
七 吉隆 終焉 の 願 あり
五 若し 男子 之 向ふ ならば

五 悔 なら ぬ 大 上人
四 怨 敵 今 ば 散 たり たり
三 象 象 敵 等 此 深 病
五 再 興 の 謀 計 測 り 難
三 天津 の 鎗 へ 入 ら せ たり
六 わ され 身 の 吾 子
三 我れ 代 生 涯 の 終 結 せ

かめ

哀れ御弟子の一分に

生る死るのたもい

一海すすかれけり

かすかに通ふ題目と

柳のしきや法の海

玉と砕けそ世に照す

ソレがらぬ壮烈は

かへさせ給はりば

のほれみ給へ大聖人

寄付枯野の虫の息

涙も曇る御経の

蓮華の潭の波音も

左近加法名日玉上

末代信者の境と

三 捨身の誓雲り

五 鏡と玉の光

六 ちる雲の絶間

四 夜風すもろ

七 つさぬ名残

五 菩提の松

四 湖の標の深み

七 鏡思阿闍日

四 周も晴れ

三 剣の月の影

四 招く間

六 松のたみ

三 今より千代の

下 引めを血潮の墓

中

上

五八

五 いけりぬの語り草
 四の緒毎刻り
 五 千代の志らへと傳へけり
 二〇

山科の別

一 都よりちかき山科の
 二 妻恋ふ席や表出の
 三 鳴る青恋も又の身や
 四 里の杉風身のみ
 五 英才智略の君のらば

六 ぼろの森も時雨つ
 三 浅野の家はまふも
 三 大石良雄か心まは
 六 屋敷のり人田畑もあ
 三 汁やなつ朝まは
 二 夜は鴨川の月夜愛が
 三 仇討の所存さうに母く
 三 名は七びもと流はれ
 三 如何なる雲やかりむ
 五 山科も水鏡の
 三 祇園の花の香はまみ
 五 酒も心も酔ひしれを
 三 早や一年は移り
 三 一り

山科の別

三

六 明はれ妻と母親が
 三 病少かれば今はとく
 七 つまは去り秋は清く
 三 見すとも守は但馬なる
 九 秋の夜更けは月清く
 下 河はれは同ト大石は
 三 心静めて篤と
 六 六 六

五 減心よめて煉め
 二 母は良徳也勅書
 五 去りも得たは家
 三 故郷へ歸る身なりぬ
 下 千草はすなぐ虫の立目の
 三 全視を向い杖言葉
 五 櫻花ある去年の春
 六 六

六 家君は臨終の
 三 我れも賜ひし心
 五 忘るは是か常
 三 影の如くは我身
 三 油断なり
 三 足跡の恥も
 三 武士の母念
 六 六

三 日向道一の短刀
 三 振る剣の束の間も
 三 吉良方より
 五 心底見んと窺へば
 五 心もなま放逸
 三 之れは敵次
 六 六

山折の別

六三

一 凡そ板之ん為なるが
二 義は名にす言ふは
三 汝は福祿の中に見て
四 ありてあそふ年
五 海は厚き御徳に
六 かく安らかに過すを
七 はんち今早や十五人

一 され武士は大義の尊び
二 況んや我君意忠深
三 天晴れ人はなれか
四 以胸差以賜ふたり
五 此れのみならず親と子
六 是皆君の恩なるが
七 日所及今武士の道

一 忘れずいづれに
二 板之所存なくとも
三 著のよみに散る人は
四 人は一代名はもつ代
五 勅むる又かろろ
六 主税は始終
七 又か忠義の本心

六五

一 命は捨てし君恩
二 只我は生先は長き汝は
三 いり情にたもへも
四 此の名はたも死ね
五 必ず無き徳は
六 こそ人命のたより
七 中身を述べしは
八 十五

一見 感涙多し 咽ひ 泣

君の 高恩 父上の

忠を 申さん 我も また

及 死するが 本望なり

作 せられた 申さん 主

良 石 慈 せられた

桐の 葉も また 昔の ごと

やがて 容れ 改め

作 成す かの ありか

武士と 生れ 上 かな

口 何事も 父上 乃

いと 健氣も 養へ

恋 といふ 後 けり

桐の 葉も 明け 空

一 時は ながれ 群 かな

今 故郷へ 入る かな

あな ぬえの 幻 見 かな

安 眠 見 かな 涙 かな

母の 中 には さらぬ 別れの なごも かな

三代も 祈る 人の子の ねめ

と 流み けん 歌 目の かな

我身の上 かな ねめ

三 おらに泣くも表は
 五 心の中より哀れ
 三 父よりついでに
 四 我の吉成代善の
 六 心の上も兄上も
 三 袂に引けば内蔵の助
 五 父は後より兄成つ
 二 つれなきもて存す大石が
 四 今年六歳の大三郎は
 三 以祖母と母様が
 三 運はせしめんと仰せらる
 五 一歩も歩むをなま
 三 大三郎成りては
 六 参るべければおらに

三 言ふも同じく祖母様也
 三 成人の後父の顔
 五 顔よりその内蔵の助
 七 おぼへずおぼへず
 三 涙が袖をかた
 三 以祖母様や母様
 五 されし叶は親と子
 三 母多き御心持
 三 忘れぬ様も
 六 流石恩愛のやうせ
 五 主親も同じ哀別の
 三 若くは父上の心本心
 三 さぶや嬉し給は
 六 阿なぬ別れの悲

三 大義親戚滅すと言ふれば是能十五下
 三 かつ首尾も仇討ち
 三 いはれむもの心の沖
 六 つまづ妻は我からに
 三 別れなれば今更三
 七 おもひ沈む母親も
 三 いかれて重き袖の露六

三 思ひはなれぬとわれど
 五 涙ながらに勇十五下
 三 又も世を来る涙六
 五 心すも後ろ髪七
 七 ぼらへどかき十五下

甲 其れ言知らぬ世人も
 下 時刻遅くん家疾七
 身 健かよがけし世七
 互 互にかへし終露七
 中 なる連れをゆく雁音の
 春 是れ此所へも止る別れは
 下 義理のよき親と子が

山神の別

四 昔乗る物成かす枯七
 四 僕にけれと泣く七
 五 世事はなせと一言成七
 下 町にても出る如軒の端成七
 下 下りる怨り関之十五下
 中 天邊坂の関のる乃七
 五 ありけり此世の別れが七

子れが妙毒の別れなる

高山孝九郎

一 義は泰山の重きに比
 二 死根玉の釜長雄が
 三 身は鴻毛と軽し
 四 心は孝と有明の
 五 至念を定むれど

一 借も上野の國新田郡の偉人
 二 忠勇義烈の傑士なり
 三 流は流まぬ二百年
 四 江戸の幕府政知りつちも
 五 吾燭燭の花の色
 六 吾は太平の高き
 七 大義の光地を滅し

一 高山孝九郎正之は
 二 時もつねや徳川の
 三 天下の人の大方は
 四 東都の所は白き
 五 秋は玲瓏の月のかけ
 六 返りもまた下は
 七 儒弱の雲はまじり

高山孝九郎

掛は浅間山所産
炭多かりし所今日
慨然として義
母禮我加ふる者
忽ち除き盡さん
打ち振るはる世
我は飯更の境

東風吹く野辺草も木も
見るも憐れむ山之が
若も尊き室室も
此身は存するも
奮起せし心の又
我家はすまはるる
西り筑紫のほそも

五 山又山我踏み破る
三 結い合する心我の士
五 東都より上る夜毎
四 遠く室居我伏し相ぬ
七 我にふる夢は九重の
三 感慨胸にせり上る
三 時穢みず誓待たれし

三 草鞋のいものふれならん
三 清き心の益良徳が
六 先づ三條の橋の上
四 草葎の道高山彦九郎
四 雲井の室を達上げん
五 髪はぬ袖を揮ふる
二 雲の中を舞下り

高島九郎

七五

四 都の人々之見

六 目ざり括す由

三 遠見返り初見今

四 鹿目を掛けて立ち上り

四 さらさらたる如き

の歌改われし松浦の

玉の沙夢のかるる

五 狂人又も来つる

四 通り掛りし朱鞘

五 霞のけり笑ふ

六 燕雀は之を鵬

三 思ふ之みても

四 斯く一首

下 通ふ淡路や

下 河ゆみ

下 雲間

三 筑後の川

五 友と

四 家綱公の代

古山

四 都改後

下 かの滴も

下 神を祈

二 振り

六 忍び

三 時節

六 百幣

七

四 あし天運の道に乘る
 六 天我仰が地を伏し
 五 憐み後へ念ト
 三 落る涙の玉幸成
 六 後播の地を失ふた
 口 道理を肝義懐胸
 口 安知一信忠魂魄

五 如何の冷方なり
 七 我か根玉の丹心成
 七 新の方成遠輝ト
 五 水はのらして哀れ
 従容笑慮外生中
 風初儀息渡皇居

折も告る入相乃一
 下 照院の澄の音も
 三 花はありとも永次下
 年あつたに祀らば
 五 薫は今も芳ば
 五 夏は養成のめ者

子年乃前

千手の命

七九

行水二の淵瀬三を渡る思四ひ
玉相五玉清六盛七盛八金九が
入る日一〇の草一一海一二の波一三は
都一四をすく之一五流一六る水一七は
身一八は是一九れを位二〇中二一將二二の
か二三げも二四知二五らぬ水二六方二七下二八
鳴二九くや牡鹿三〇の津三一の志三二の

く西一八條二の銀三なる
葉四華五の夢六もかげらふの
谷七さう惜八む一九門一〇は
つり痛一一けや重一二衛一三郷一四
古一五は雲一六のく人一七
月一八の初一九すめら夢二〇は
生二一田二二か森二三の我二四は

武一道二松三な生四捨五ら
思六ひやもだ七い哀八れ
雲九井一〇の都一一よりかす
ほり越一二ゆる足一三柄一四は
今一五は涙一六も雲一七も
南一八都一九尖二〇上二一の科二二あれ
たゆむは明二三ら星二四月二五夜二六

心一の外二の都三入り
地四處五はつが八六橋七の
ら河八の國九や遠一〇く
大一一蔵一二少一三蔵一四見一五波一六は
身一七は朝一八敵一九のつらさへ
程二〇もつらせず玉二一の緒二二は
浦二三念二四山二五まが入二六る

千々の奇

四 花の顔月の眉
 三 頼朝の思ひを
 二 誓ふか問を預るれ
 一 雨蕭々の夕室に
 宗茂酒次すむれり

四 憂ふふし旅なれば
 三 いも雲を見ゆるか
 二 将野反宗茂
 一 公か侍女なる千子
 時も夏の初めの方
 懐もほき玉
 頼朝公の御定を

四 千子は琵琶
 三 楚囚の君死に侍
 二 重御卿も琵琶
 一 柳をかねたるむねの中

四 手鼓の長者か娘なる
 三 心様さへ優し
 二 泪涙流ふか
 一 志はか程は弾き給ふ

燭閣ぬり虞氏涙
 千子日記

夜途四面楚歌
 八三

四 斯く歌しるる重漸も
 三 都の花と葉之誠
 三 志の故も縁之ぬ雨の清
 上 移れば変る世の中や
 五 同し流れば或拘ふた
 四 千手か歌いし心
 四 かく下置重ぬれぬ

三 宿にのさすや昨日迄
 五 今日ほ東の室も
 三 志ほろ袖の色
 三 一樹の落る存り合ひ
 三 みな是れ他生の縁
 四 いかすゆくらん東人
 三 別けゆくおまの時鳥

中 既色成枕もうたぬの
 七 明言に早き夏の夜の
 三 初逢なれば冷方も
 三 其後朝ふた
 三 可憐盛や散る牡丹
 五 契り幾仇も
 五 君なき我は何せ

下 巾のも寝る東雲乃
 五 鏡かき契りも合は
 三 涙の玉珠の袖とろぞ
 四 暮丹のよる良の都の夕光
 三 哀れ一夕夢逢の
 六 見よ花の衣も合は
 三 夕まみの雨のあやみだ

千手抄

八五

中
一 嘆かたに沈む人の多し
二 やれ安も累深し
三 ことむろふ人不可有難し

下
一 信濃の國の善光寺
二 重徳卿が七女後成り

二 富士の裾野の将場を
一 一日は時も忘れ得ぬ
四 父祐康の妾執成
六 ぶわさりながらの時致よ
三 介は始めぬ事ながら
五 我等兄弟先立ち
四 我等兄弟先立ち
三 我等兄弟先立ち
二 我等兄弟先立ち
一 我等兄弟先立ち

二 富士の裾野の将場を
一 一日は時も忘れ得ぬ
四 父祐康の妾執成
六 ぶわさりながらの時致よ
三 介は始めぬ事ながら
五 我等兄弟先立ち
四 我等兄弟先立ち
三 我等兄弟先立ち
二 我等兄弟先立ち
一 我等兄弟先立ち

十袖書

三 敵と藤祐経が打争
四 今より晴ら奉らん
三 老少不定の道理は
三 老なる母成残一
三 亡き世の人を関し
四 只るれをなぐさるるの内

四 今生の心腹申し金

三 少袖なりと賜りて

七 ねまの子も祐成取

五 背き一玉孝は定代

三 勤氣蒙る身はれど

四 打萎れそ語りあむ

イザは汗の心勤氣は

三 せめては母の心かたみ

四 潔く縁立

某は法師の心名取

三 二年のわた母上より

兄上よりなにかい

祐成弟の手取

某は汗申し上げ

三 少袖も賜はらん

母の心へと赴き

流石は心後

門より堅き心地

横縁の隅を居たり

謙倉取より成るは

末代は物の語りに

少袖書

打ち連れ立て兄弟は

勤氣成りけり時致は

障子一重はくらかねの

母の居間へは入る

祐成母の申す様

以沙活蒙る身がらぬ

以將の心代思ひま

八九

八八

一 少袖一重賜りしへ
 二 十二の将の巾着もや
 三 浦松原 畠山
 四 さらといやかきするに多換へて
 五 ろれさへ母は悲心ゆに
 六 身之父の祐康が
 七 不吉の場所を候がや

一 一もかきしはれど
 二 地修及以始と
 三 馬物の具も有らばや
 四 将場とすはばを猶
 五 帯次縁め給いつる

一 ならし事ならは將の巾着
 二 斯く申さば此母が
 三 さらば少袖を参らせん
 四 神なりぬ身のほらちねか
 五 千草次縫へる少袖あり
 六 母の手づから賜りし
 七 夫はためらひ居りしが

少袖書成

一 思ひ止まり給ふ
 二 小袖一重惜むに似たり
 三 是か此の世のかたみとも
 四 情の露も涙草や
 五 模様面白ければ
 六 祐成是次か
 七 某同様時致も

四 将場の時着るるものへの

三 おもひ入る申しけり

六 障子まじしと身成り

七 母は怒りの勢高

四 妻は此世も身の外

四 もはや幼膏せし上は

五 すげな言葉も祐成は

四 少袖一重賜りて

七 首尾や如の時宗は

四 奥の様子必窺へ

五 ろも時致は准か

三 箱まを申す子のい

三 親子の縁も候はず

四 箱まを申す時致

一 疾縁を紅へ候

六 誰か許し山

四 説き母の御作

加 頼みの綱も切れ果

外 泣きとがれたる

四 刀の鯉口えらげ

一 許し母を上げ

少袖期

七 云はせも果す母親は

五 疾り進出給へ

三 落し立関時致

三 人目なれば疾縁

四 斯くは果てし祐成

七 生進も幼膏

一 生を甲斐なき

九

兄か子に掛ける細首

すまにこよら見之れど

片輪な子成持まな

焼野の雛子初り船

右と左の兄弟成

親の心成子けり

首切る事の有るや

打落し申さん

のふ侍てまげ

親は怒も忍び

子故違ふ親おろ

毎年の玉と

は現在の弟の

母は息まはに

すかり歎けば

まの勿体な有難

笑の手成取り静

母は一目見るとも

先立つものは涙

斯くも母より時致

祐成諸共甲斐

秘すはの勅書ゆれ

娘は涙をかこ

母の前より出

互いま年にも取

志げ言葉もかり

因とく小袖賜

将場の着看に

小袖雪吹

九五

七五

心残々曾我の屋
 狩場は掃く急ぎ馬
 峯のふたは箱根山
 水音もあつても
 少袖もとく介もあつた
 佐々木氏毎日は馬めけり

見返り〜兄弟討
 道も冷〜定柄の
 流れも清き早川乃
 孝心深き兄弟が
 佐々木氏毎日は馬めけり

ミドリ琵琶新聞

△毎月一回 十五日 発行
 △購読料 一ケ年間金六拾五錢 (郵税共)

■ミドリ琵琶新聞 は琵琶同好者の座右を離すべからざる新聞にして毎月新曲琵琶歌及び文學者の琵琶歌註解等を掲載し有益なる記事全紙に充滿せり

■ミドリ琵琶新聞 を讀めば琵琶界の情況は居ながら手に取る如くよく解かる

■ミドリ琵琶新聞 を讀めば琵琶道の新智識を得られ

■投書歓迎——記事の如何なるを問はず投書を歓迎す
且つ琵琶樂に關し如何なる質問たりとも回答す
■購讀料は郵便小爲替にて送金あれば直ちに新聞を郵
送いたします

大阪市南區難波新地五番町二四

ミドリ琵琶新聞社

(電話土佐番二〇三〇)

大阪市南區難波新地五番町二四
筑前琵琶綠水會長

水也田流宗家 水也田綠水

◎習得者の心得

一、琵琶は歌ふものにあらずして談^{カマ}るものであるから一言一句文章の意
味をよく理解して歌中の人と成り演奏すべし。
一、筑前琵琶の特長たる流しの内、春節は艶音にして優長なる事恰も春
日花に對するが如く、夏節は強音にして森嚴なること初夏新綠發生の
感ある如し、秋節は清音にして洒落假令ば露夜明月を眺むるが如く、
冬節は愁音にして乾燥恰かも木枯の梢頭を吹くが如し、又山越節は舊
來の筑紫節にして最と婀娜たる調子なり、旭節は右と正反對の調子に
して詩吟の趣あり、春節は七の音調にて起り、夏節は六、秋は五、冬
は四より起ると心得べし。
一、初學者は琵琶の合の手(彈法)と歌と連絡調和せぬものだが此合の
手は歌詞の喜怒哀樂を一層完全に表はすものであるから歌の研究と共に
彈法の研究を怠つてはならぬ、例せば悲哀の合の手五號、十一號等

の手も弾き法が悪むいと少しも悲哀には聞へない、折角一生懸命に歌つて悲哀を表して居ても合手の弾き法が悪むい爲めに歌を殺してしまふから弾法をおろそかにしてはいかぬ、悲哀の手は悲哀に勇壯の手は勇壯に弾かれればいけない、即ち弾法の功拙は歌の生死に關するものである。

一、琵琶の習得法—初學者は初めから難づかしい歌曲を習ひたがるものだが小學校生徒が大學校の學科を習つて解る答が無いのと同じ事で段々と初傳、中傳、奥傳、皆傳と階段を踏んで行かればいけない、又一つの歌曲を一日でも早く揚げて數ばかり進みたがる人があるが大變にいかぬ事で一曲がよく腹へ入つてしまへば次に習得すべき歌曲は容易に解る事が出来る、然るにどの曲もく荒覚えにして置くと前のから前のから忘れてしまふからよく注意すべき事である。

一、聲の練習法—聲は必ず腹から出さぬと聽者に感動を與へない、聲の悪むい人でも毎日練習さへ怠らなかつたら自然に出る様になるもので

ある、又どれ程調子の高いよい聲の出る人でも調子の底い先生に習つて居ると知らずく調子が底くなるものであるから自宅で稽古する時毎日一回だけ演奏會に演奏するつもりで自分の調子より半本又は一本ぐらゐ高い調子で一時間ぐらゐ練習するのがよい、然らば知らず知らずの内に聲量が増して来る。

左に音聲研究に際して注意すべき條項を示して置く。

- 一、酒、酢、わさびの如き刺激物を飲食せざる事。
- 一、夜更かし及び朝寝をせざる事。
- 一、演奏せんとする前多量に喫煙すべからず（禁煙に越す事無し）
- 一、茄子の類を食さぬ事。
- 一、演奏せんとする五時間程前に肉食する事。
- 一、演奏せんとする三十分程前玉子を食する事。
- 一、演奏前には端座してなるべく身體を安靜にしてあまり歩行等せぬ事。

一、姿 勢—何より目立って見えるのは彈奏者の姿勢である、端然と姿勢を正して居ると聽者の方でも勢ひ眞面目に成つて聞く氣になるが彈奏中に首を振つて見たり歌曲が佳境に入りつゝある場合に不眞面目な姿勢でギロリ／＼と聽者の顔を睨逼したりすると折角身を入れて聞かうと努めて居ても悪感情が起つてつひ悪騒ぎの一つもする様になるから注意せねばならない。

一、歌詞の間違—琵琶の彈奏者には歌詞の間違つた處を平氣でやつて居る人が有るが心ある人が聞いたらいよいよ物笑ひになるから充分に文章は注意して間違ひの無い様にせねばなりません、本書に關し曲節の不審等有し時は切手封入の上御聞き合せに成れば直ちに回答致します。

綠水會長

水也田旭嶺識

大正六年八月二十五日印刷
大正六年九月一日發行

定價金參拾錢

作曲 水也田 綠水

大阪市東區南渡邊町八番地

發行兼印刷者 前田梅吉

大阪市東區南渡邊町八番地

發行所 前田文進堂

電話東四九九八
振替阪一二四七三

禁轉載

賣捌所 全國各書店

既刊春の巻目次

君ら代 敦盛段上
敦盛段下 山城
小督局 備後義家
錦の御旗段 錦の御旗段
赤垣源藏 月照
常陸丸 備後三郎
平野次郎 白虎隊
廣瀬中佐 蕾の花
曾我 本村長門守
勾當内侍 以上

既刊夏の巻目次

春日野 臺灣入
河内の宿 松の廊下
扇の的 石童丸
太田道灌 四條暎
竹林唯七 叢雲
宇治川段上 宇治川段下
湊川 梅若丸
海洋島 静御前
以上

既刊秋の巻目次

川中島
湖水渡 鶴
夜の吹雪
伏見の吹雪
佐渡の若竹
佛御前
泉の三郎
小楠公
勅進帳
義民の魚籃
隅田川
吉野静
以上

既刊冬の巻目次

大高源吾
櫻井の驛
桶中佐
伊賀の晴
菅公
護良親王
義士の本懐
靈馬の漣
菊水
高田馬場
南部坂
以上

春のト既刊

稲村ヶ崎
沖の禰
朝比奈三郎
朝比奈三郎
小督の局
蔭の禰
蔭の禰
橋の禰
高千穂
高千穂
旅順の禰
七州南
全州南
梅若丸
大江
以上

夏のト既刊

益我木
静の禰
静の禰
日本橋
名残の花
義平
芳流閣
吉野山上
吉野山下
東津原
辨の内侍
以上

秋のト既刊

櫻田の泡雪
吉野静
山崎合戦
濡衣
名和長年
乃木將軍
小松原
山科の別
高山孝九郎
千平の前
小油曾我
以上

冬のト既刊

屋島
別益
船坂山
荒乳の團
本能寺
千早城
實盛
項羽
菊の礎
蒙古の寇浪
以上

新曲の上既刊

茶畑山
村上喜剣
檀の浦
田村郎
川大高源吾
寺坂吉石門
佐久間少彦
龍の口
菊地武光
和氣清磨
新嵐合戦
以上

端歌の巻既刊

君が代松上鶴
日本刀四季の
貝は歳迎炭千鳥
水は石小の督
金剛石沖の石
立田の楓菅の公
梅が香栗合戦
春の夜七那落
近江八景夢の跡
月日は麗姫小松
松の緑琵琶歌
社頭の杉櫻の狩
義士母の
國船夢の
以上

筑前前彈法譜上

訂正本

各參拾五錢下

終

終
三